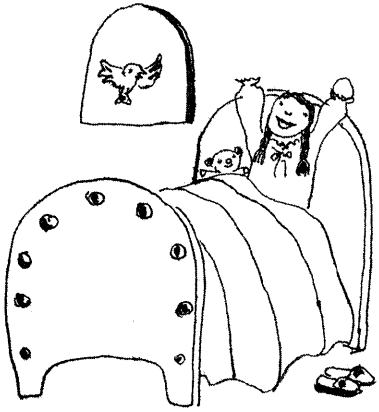

日常の中から

はるにれの会
大沢　啓子

前回この欄に、私の家族のことを書かせていただいてから、もう二年が経ちました。おじいちゃんのいなくなった生活にも慣れ、私もすっかり専業主婦にひたりきっています。毎日、子どもの幼稚園とおけいこごとの送り迎えに時間と体力を消耗し、そのこま切れの時間の合間に家事や息ぬきをしている私です。最近では、亮のしがみつくような甘ったれからも解放され、講演会やちょっとした勉強会にも行かれるようになり、少しずつ自分の時間を楽しめるようになりました。

我が家の茜と亮も小学校三年生と幼稚園の年中組になり、それぞれの生活も外へ向かって広がっているようです。

「お母さん、私、困った事があるの。どうしたらいいかわからない。」

ある日、学校から帰ってきた茜に、相談をもちかけられました。

「私、レイコちゃんとワタナベさんの両方から『オー

ちゃん（茜の愛称）は、私達二人のうちどっちが好きなの？』ってきかれるの。レイコちゃんからもワタナベさんからもきかれるの。どうしたらいいの？」

「茜はどっちが好きなの？」と私。

「それが、両方とも比べられないから困っているの。どちらも好きなんだもの。」

「それじゃ、そう正直に言ったら？」

「でも、そういうと、それじゃダメだからどっちか答えてって言われるの。」

私は、レイコちゃんの方は一年生の時から同じクラスの仲良しだったので、よく知っていましたが、ワタナベさんの方はあまりよく知りませんでした。お母さんとも面識がありません。――これは困った。これと同じようなことをよくきかれることがあります。

「お母さん、亮クンと私（茜）とどっちが好き？」とか、「おじいちゃんとおばあちゃんと、どっちが好きだった？」とか。子どもは確かなものをききたがります。誰だって「あなたの方が好きよ」と言ってほしいのでしょうが、両方とも好きという事もよくあることなのです。茜もそれはよくわかっているのです。

「どう言えばいいの、ねー。」とくり返す茜。

その日は土曜日でしたので、家にいた父親にも相談していましたが、良い結論は出ませんでした。

「茜ちゃん、学校の先生に相談してみたら？　先生だったら、そういうお話し、たくさん知っていらして、いいアドバイスもらえるかもしれないわよ。」

私はここでひとまず、先生にバトンタッチして、その話しから離れてしまいました。ところが、ここから先

も、茜はずーっと悩んでいたのです。

次の日、日曜日の夕方、おつかいから帰ってみると、茜が手紙を封筒に入れています。

「何？　これ。」

「先生にお手紙書いたの。」

「どうしてワープロなの？」

「だって私の字だと、私からの手紙だってこと、先生にわかっちゃうんだもの。わかると困るの。わかるとワタナベさんとレイコちゃんが先生から職員室に呼ばれて、私も呼ばれて、三人で先生に話しをきかれるから。この事、だれにもしゃべらないでって言われているのに、先生に相談したことバレちゃうでしょ。それに学級会なんかで、先生がみんなの前で『こういうことがあるんだけれど、みんなだったらどうする？』なんて発表されちゃうかもしれないから。だからワープロでお手紙書いたの。」

文面を見ると、相手の名も匿名で、文章もきちんと書けています。最後に〝先生、このことは絶対、だれにも話さないでください〟と念押しの文章もあります。ご立派!!　こんなことでなければ「茜ちゃん、ワープロ、随分上手に打てるようになったのね。」とほめてあげたいところです。でも、うーん。またも考えてしまいました。そして次に、

「こんなことやめなさい。これは絶対いけない!!」茜は半ベソです。

「先生だって誰が書いたかわからない手紙には答えられませんよ。匿名なんてずるいのよ。相談したいことがあるなら、ちゃんと自分を名乗るべきでしょ。これではいいかげんないたずらと思われても仕方がないことなのよ。」

茜も一応納得したようで手紙のことはあきらめ、話はまた、ふりだしにもどりました。その時、それまで黙ってみていた父親が、

「茜ちゃん、その手紙は良くないよ。それに、お友達に本当のことをはっきり言えないのは、茜が悪いんだよ。」と言いました。

「本当のことを正直に言ってわかってもらえないのは茜も悪い。お友達だって茜がはっきりした態度をとらないから不安に思っているんだ。明日は二人のいる前で自分の気持ちを全部話して、それでもわかってもらえないなら、そんなに自分を困らせるような質問をするような二人は好きでない、そんな話しは嫌いだとはっきり言いなさい。」

これでいいんです。はじめからこれしかない答えだったのに……。母親の頭というのは、余計なことを考えすぎるのでしょうね。父親のきっぱりとした助言で茜の気持ちもすっきりとしたようです。次の日、学校から帰ってきて、

「お母さん、あのこと二人に話したらわかってもらえた。よかった!!」とニコニコ報告してくれました。よかったね、茜ちゃん。

茜も「友だち」を考える年齢になってきたのですね。友だちを大切にしたいという気持ちが育ってきていたからこそ迷ったり悩んだりしたのでしょう。〝心をこめて〟ひとに気持ちを伝える……言葉だけでなく本当に〝心〟を大切にしたいものです。

亮は相変わらず、甘ったれで、はずかしがりやで、チョロチョロしています。先日、ご近所のトシクンとこんなことがありました。トシクンは亮とはちがう幼稚園の年長組に通っています。とても利発な子ですが家の中で遊ぶことが多く、二人はまだ一緒に遊んだことがありません。でもお母さんとはたまにお話しするので、お互いの存在はよく知っていてそれぞれに興味があるようです。

ある土曜日、幼稚園から早く帰ってきた亮は、家の前で、いつも遊んでいる小さい子たちと一緒に遊んでいました。そこへトシクンが幼稚園から帰ってきて、通りがかりにお母さん同士の立ち話しとなりました。子どもの方はお互いに気になるようで、牽制しあっています。トシクンが先に手を出しました。私がそれを見て「うちの亮クンはやられても泣かないよ。」と言ってしまったの

です。何とうかつな、黙っていればよかったのに、あっという間のできごとでした。トシクンのチョップが亮の頭の上にきました。すかさず亮がトシクンに足蹴り二発。あわてたのは親の方です。いそいで二人を引き離し、「そんなことしないのよ!!」

瞬間のでき事でしたが、いろいろ考えさせられました。けしかけるつもりはなかったにせよ、自分で言った言葉で子ども達がすぐに行動したことに驚いているなんて、何という親でしょう。子どもが何かしようとしている時の一言、これは次の行動に大きな影響を与えます。気持ちをおさえることもあるし、はずみをつけることもあります。トシクンは何を思ったのでしょう。私の言葉

が本当かためしてみたのかもしれません。それにしてもあの反応のす早かったこと。二人はそれまで牽制しあって緊張していた空気の中で、このチャンスを待っていたのかもしれません。親が止めなかったらもっとやって、お互いを確かめたかったのかもしれません。そういえばあの二人、意外にケロッとしていたな——。止めたことも私の先走りだったのかしら。でも、よその子にもしケガでもさせたら、そんな呑気なことはいっていられません。

この話しはこれだけのことでしたが、あの時、あの二人はきっと一緒に遊びたかったのでしょう。あの時、トシクンに「カバンを家において、遊びにでておいで。」と言えばよかった、せっかく遊べたかもしれないチャンス、残念なことをしました。この次は一緒に遊べるといいね。亮クン!!

何かができるようになる——これはとても大きな喜びと自信になります。それまでできなかったことが、ある

時を境にできるようになるのです。背の高さはきのうと変わらないのに、急に五センチ位大きくなったような、そんな気がして……「できるようになる」ということは、子どもにも親にも嬉しいことなのです。

亮は四歳の誕生日を迎えた時から、スイミングの教室に通っています。はじめは茜が、体が弱いので体力づくりに、と始めたことなのですが、つきそいで通っているうちに、亮も一緒に習うことになりました。

行きはじめて一年程経った頃のことです。だいぶ泳ぎらしくなってきて、クロールも25メートル泳げるようになり、進級は今日かしら明日かしら、と心待ちに練習に通っていました。ある日、練習の終わったあと、先生から、「亮クン、合格したい？」とたずねられました。先生が、そうおっしゃったということは、「合格」にしてもいいという意味なのだろうと思いますが、亮は首を横にふりました。先生はもう一度「合格したいんじゃないの？」とたずねましたが、また、はずかしそうに首をふり、三度目には「イヤダ!!」と言ってしまいました。そこで先生は、練習カードのその日の印の場所に◎と三重の大きな丸をくださって、合格にはなりませんでした。帰る道々、「どうして合格になるの、イヤだって言ったの？」ときいてみると、「あのね、」ちょっと間があって、「いやだったの」……言葉ではうまく言えません。でもあの時の亮の泣き出しそうな顔は、やっぱり合格になりたかったのでしょう。ではどうして「いや」だったの、亮クン。「合格」の判断は、先生が決めることで、自分では決められないと思っていたのかもしれません。でも一番の理由は、やっぱり自分でも、今日は25m泳げたけれど、この次同じように泳ぎきれるかどうか、自信がなかったのでしょうね。自分自身にとってもっと確実な余裕がほしかったのではないでしょうか。

自分でできることでも、できないと思っている時には自信がありません。先生に三回もたずねられても「イヤダ!!」といってしまうなんて、この自信のなさでは……。やはり「不合格」なのでしょう。

次の日は予想通りがんばって、目標の25m四回を泳ぎきりました。言葉では言いませんでしたが、「今日は合格するぞ!!」と自信をもってがんばっているのがよくわかりました。もちろん文句なしの「合格」です。帰り道の亮の顔、本当にうれしそうでした。

自分でできると思えることはとても大切なことですね。

茜も一つ自信がもてる体験をしました。ひどい方向音痴の茜が、夏休みに一人で山の手線を一周してくるといいだしたことです。

茜は、幼い時から車で行動することが多かったせいか、家を出ると、自分が今どこにいるかよくわからなくなります。誰かにくっついている時には良いのですが、これでは一人で行動できません。我家はJR駒込駅と巣鴨駅、どちらからも20分程歩いた所にあり、この二つの駅を主に利用しています。でも茜はそのどちらへも一人では行ったことがありません。一人で行ったことがなくても大抵の子は、何回も大人について行けば、道順ぐらいおぼえてしまうでしょう。現に、まだ五歳の亮でさえ、どちらの駅に行く道も知っています。決してむずかしい道ではないのですが、何回通っても茜の頭には入らないようです。駅からの帰り途、「ここからはどっちの道へ行ったらいいと思う?」ときくと、必ず方向をまちがえます。道とか方角とかは興味がないのかもしれません。その茜が、一人で電車に乗って山の手線を一周してきたいというのです。

話しは春休みに逆のぼります。広島にいる妹の子が上京してきた時のことです。この子は茜にとっては従兄、この春中学生になったばかりのお兄さんです。急に相談がまとまり、二人で川崎の姉の家まで行こうという話しになりました。私もしっかり者のお兄ちゃんと一緒なので、心配はないと二人を送り出しました。ところが、帰りの道のり、新宿駅で茜がはぐれてしまったのです。茜からの電話で、はぐれたことを知らされたのですが、かんじんな茜が、自分が今いる場所がよくわかりません。

「駅の中だけど、どこだかよくわからない。」「小田急線なの？山の手線なの？どっちの駅なの？」「わからない!!」お兄ちゃんの方は、一人でも帰ってこられますが、茜の方はだめです。「もとの場所にもどってもう一度よくさがしてみなさい。」と言って一応電話をきりました。それから三〇分、ようやく連絡があり、二人はうまく会えて、もう巣鴨までもどっているということでした。こちらは連絡がないので心配していたというのに……当人たちはさっぱりとしたもので、二人で楽しそうに帰ってきました。

このことがあって、姉や妹や夫との間で、子ども達が迷子になった時、どう対処するのか、その子によって性格がいろいろあり、おもしろいという話題になりました。自分で判断し、目的までたどりつける子。案内の字が読めない子。読めても判断のつかない子。迷子になった意識があまりなく、けっこう不安なく行動してしまう子。不安ではあるが、まわりの駅員さんや大人に助けを求められる子。等々。「新宿駅の人ごみの中から一人で帰ってこられたら、これは相当な自信につながるよ。一度、迷子にさせてみるといい。」などと、無責任な考えまで出て、話しは盛り上がりました。茜にとってはこの時のことは、不安の中にも楽しい経験だったようで、「この次は一人で行ってみたい!!」と心に決めていたようです。

夏休みも終わりに近づいたある日、いよいよ決行ということになり、茜は一人で出かけて行きました。いざその時となると、こちらの不安の方が大きく、くどくどと持ち物や注意の念をおしたり、山の手線の駅名を紙にかいて持たせたりして、かえって子どもに笑われてしまいました。たった一～二時間でもどってこられることなのに……心配したらきりがありません。我が子の自立をさまたげているのは、私自身なのですね。そのことはよくわかっているのにそれでも心配で。こまった親です。それから一時間半ほどして「ただいま!!」と、茜は元気にもどってきました。

第一声は、「お母さんが心配するほど、たいしたこと

はなかったヨ。」ケロッといってくれるではありませんか。まあ、とりあえず、無事に帰ってこれてよかったと胸をなでおろしました。

あとになって本音の部分をききだしてみると、楽しかったというより、だいぶ緊張して電車に乗っていたようでした。

「お母さん、半分位までは、次の駅の名前ばかりが気になって、まわりの景色なんか目に入らなかったよ。」

「新橋か東京ぐらいから知っている駅の名前が出てきてほっとした。東京から駒込、巣鴨の間は、知っている駅だった。」

「知らない人に『どこまで行くの？』って話しかけられたの。だから『山の手線を一周するんです。』って答えたの。でも急に話しかけられて、ドキドキしちゃった。」

「途中で、おじいさんに席を譲ったの。」

「大きい駅はたくさん人が降りて、又、たくさん人が乗ってくるね。」等々。

「山の手線一周」……行動としては、同じ電車に乗っていれば、一周りして又、元の駅に戻ってくるだけのことですが、親も子も一大決心してのイベントでした。茜はこのことで、方向音痴の汚名を返上しました。（まだ少しあやしいかな？）そして、学校や家庭では学べないたくさんの大切な勉強ができたことはなにより嬉しく思いました。

子ども達の目はどんどん外に広がっています。親の視界を越えて、自分の目で物を見るようになるのでしょう。特に三年生の茜は、飛びたとうとするひな鳥のように羽根を広げて準備をしています。親鳥は少しずつ、そして時には大胆にひな鳥を訓練します。心配性の私には、大胆な後押しはできないかもしれません。でもせめて、暖かい巣ぐらいはととのえて、ハラハラしながらも、子ども達を応援してあげたいと思います。